

# 松浦武四郎の調査記録による 蝦夷地の地域構造の分析

片上 広子

- I. はじめに
- II. 研究方法
- III. 蝦夷地の“場所”と北海道の地域区分
- IV. 蝦夷地漁業の実態からみた地域構造
  - (1) 西蝦夷地の場合
  - (2) 東蝦夷地の場合
- V. 和人地からの距離がもたらす地域の特性
- VI. おわりに

## I. はじめに

本稿は、松浦武四郎の遺した調査記録をもとにして蝦夷地の地域構造を把握することを目的とする。幕末の蝦夷地を研究した人たちに、高倉新一郎をはじめとして足利健亮や遠藤匡俊がいる。これらの研究成果をふまえた上で、筆者は松浦武四郎の業績に基づいた蝦夷地全域の地域構造の分析を試みたいと考える。数多くの蝦夷地探検家のなかでも、筆者がとくに松浦を選んだ理由を述べておきたい。

それは単に、彼が筆者の同郷の先人というだけではない。三重県一志郡三雲町字小野江の郷士の四男として生まれた松浦は、幕末から明治という激動期に6回にわたり蝦夷地を探検して、その踏査記録を克明に日誌に著し、詳細な地図を作り、それまで全くの空白部分であった蝦夷地内陸部の地理を明らかにするなど、膨大な記録を残したのであった。

しかも、松浦が最も心を痛めたことは、探検調査にあたり親しく交わったアイヌの人々が、松前藩や

和人の商人に酷使されていた惨状と、そのためにアイヌの数が著しく減っていくことであった。松浦の視点の大きな特色は、いつもアイヌの人々の立場に立って蝦夷地をとらえようとしたことにあったのである。

明治新政府が、「蝦夷地」を改め新しく命名する際に、開拓判官松浦武四郎は、日高見道・北加伊道・北海道・海島道・東北道・千島道の6つを提案した<sup>1)</sup>。それぞれに歴史的な由来があり、北加伊道（ほっかいどう）については次のように述べている。「加伊と呼ぶこと、今に土人共、互いにカイノーと呼ぶ、女童のことをカイナ、男童の事をセカチー、また訛ってアイノーとも近頃呼びなせり、頭書之説、実に宣し<sup>2)</sup>。」つまり、加伊はアイヌ語の蝦夷（カイ）<sup>3)</sup>をもじったもので、北加伊道は北蝦夷道というのと同じである。すなわちアイヌの国を意味している<sup>4)</sup>。結局この北加伊道が採用され、加伊に海の字をあてはめて「北海道」の名称が誕生することになった。

ところでこれは、松浦が用いていたペンネームのひとつでもある北海道人と全く同一であった。それほど松浦は北海道をくまなく歩き、すべてを知りつくし、また愛していた人物であった。すなわち、「北海道」という名のひびきの中には、もともとこの地の主であったアイヌの人々のことばと松浦武四郎自身が生きているといえる<sup>5)</sup>。

さらに、アイヌの部族ごとの住み分けの実態を観察した結果から、北海道を11カ国86郡に地域区分す

るという仕事にもたずさわり、国名・郡名なども松浦が決定した。それまでは、東蝦夷地・西蝦夷地という大まかな2つの区分しかなされていなかったのにくらべると画期的な作業であり、それを行なうことができたのは、松浦をおいて他にはなかった。

以上のような理由から、とくに松浦武四郎を選び彼の目を通して捉えられた蝦夷地について若干の考察を試みる次第である。

## II. 研究方法

松浦の行なった地域区分は、アイヌ部族集団の住み分けに基づく“場所”制度が根拠となっていたと考えられる。

当時、松前藩の領地であった蝦夷地では、米がとれなかったため、それに代わるものとして、蝦夷地漁場を数多くの場所に区切って、これを知行地として藩士に分け与えた。場所の境界は、アイヌの酋長の勢力範囲、すなわちアイヌ部族集団の共同漁場の境界が基礎となっていた。

場所ごとに交易所を定め、場所を持った藩士が自らアイヌと交易を行っていたが、交易が次第に大規模になってくると、松前や函館の大商人たちにこれを請け負わせて上納金つまり権利金を徴収して藩の財源にするという方法をとるようになった。この商人を場所請負人、上納金を運上金、交易所を運上屋と称した。場所請負人は、蝦夷地の産物をより一層増やすため、アイヌとの交易だけではなく、アイヌを労働力として使役する漁業経営権までも掌握するにいたり、海産物を藩士に代わって内地に高く売って暴利を得た。

このように、場所制度という特殊な時代背景を考慮した上で、場所ごとにみるとどのような構造になっていたか。それを把握するため次のような方法をとることにする。

まず、弘化・嘉永年間（1844～1854）の状態を示す「蝦夷地各場所見取図」と明治2（1869）年に松

浦が作成した『北海道国郡図』とを照合して、どのように国郡分けを行ない、なぜそのように区分したのかを考察する。同時に、運上屋の位置をプロットし、どの地域で開発が進展していたのか、蝦夷地全体像の概略をみておきたい。さらに詳しく地域の特性を把握するために、松浦の調査日誌である『三航蝦夷日誌』や『東蝦夷日誌』『西蝦夷日誌』などから、アイヌ一人あたりの運上金、持ち場一里あたりの運上金、持ち場一里あたりのアイヌ人数を計算し、各場所のウェイトを調べた。

また、上述の数値のうちでも、蝦夷地漁業の生産性を比較するうえで、とくに重要な指標であると思われるアイヌ人数と運上金に注目し、アイヌ人数および運上金の最高値を100とした場合の各場所のポイントを算出してこれをグラフ化し、アイヌ人数と運上金の相対的關係を把握し、東蝦夷地と西蝦夷地の両地域の性格を比較検討した。さらに、和人地からの距離によって、口蝦夷地と奥蝦夷地とは地域の特性にどのような相違がみられるか、とくに、アイヌ人数や労働力としてのアイヌ集約度を中心に比較してみた。

## III. 蝦夷地の“場所”と北海道の地域区分

蝦夷地は松前藩の領地であったといっても、蝦夷地全域が支配されていたわけではなかった。蝦夷地では、農業、ことに米作はほとんど行なわれておらず、和人の主食である米は内地に依存していたために、和人の蝦夷地奥地への移住ははるか後代のことに属し、主たる和人居住地は渡島半島部に限られていた。松前藩は、松前の城下を中心として、西は日本海岸の関内、東は太平洋岸の山越内を境として<sup>6)</sup>、それから以南を和人地（シャモ地）<sup>7)</sup>、以奥を蝦夷地（バシヨ）<sup>8)</sup>とした。その境には境柱（幣束）<sup>9)</sup>を立てて関所を設け、和人地にはアイヌの来住を、また、蝦夷地には和人の往住を禁止し、和人の居住地を一隅に限定した。これは、アイヌの統治政策上、また、

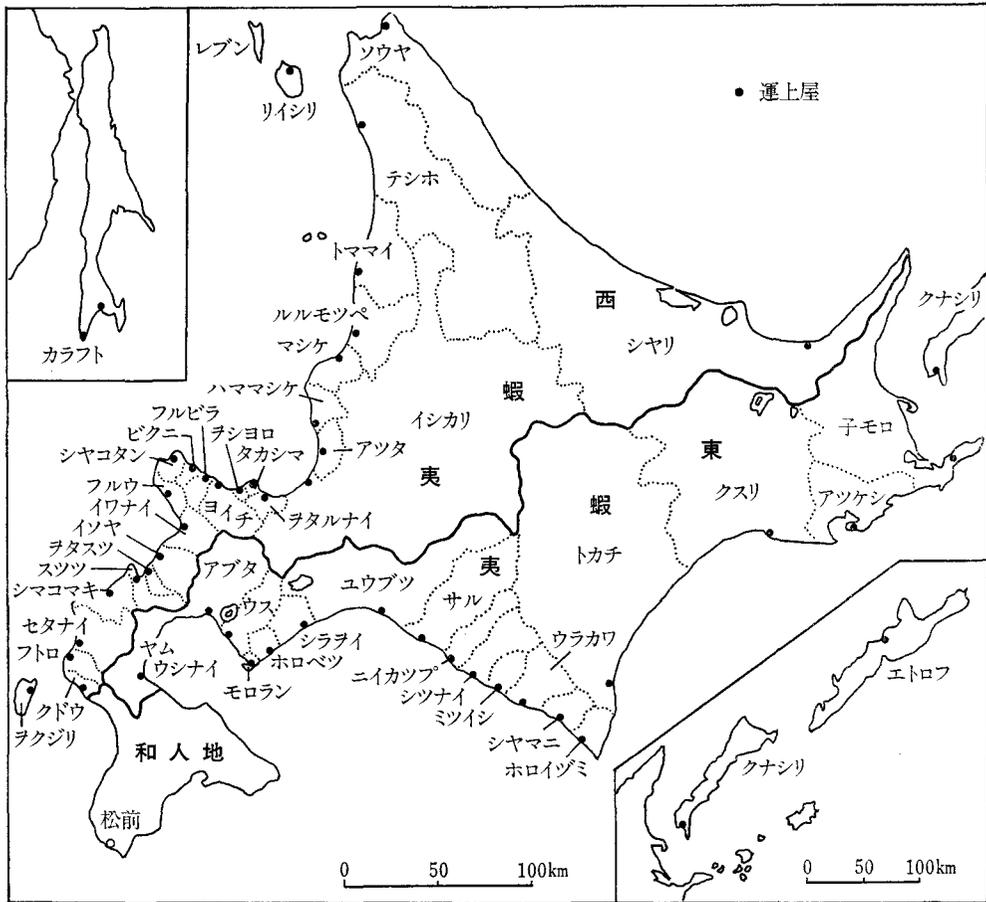


図1 蝦夷地各場所見取図（弘化・嘉永年間）  
 『新北海道史』の原図に加筆

松前藩が蝦夷地交易の利を独占するためであった。要するに、蝦夷地とは、和人地を除く北海道本島と、千島・樺太を意味していた。なお、和人は千島を含めた太平洋側を東蝦夷地、日本海側とオホーツク海側を西蝦夷地、樺太を北蝦夷地と呼んで分けていた。

図1によれば、早くから形成されていた和人地に近い地域では、場所が細かく分けられ、個々の場所が小さくなっている。しかし、和人地から遠く離れるにしたがって、トカチ・クスリ・シャリなどのように、一つの場所が大きくなっていくことが看取され、和人の開拓が南部から北へと進められたことが知られる。

この地図を、明治政府の開拓判官に登用された松浦武四郎の『北海道国郡図』（図2）と比較すると、和人地に近い小さい1場所はそのまま1郡に定めている。一方、和人地から遠くて大きい1場所は、内陸部をふくめて数郡に分割されている。例えば、イシカリ・トカチ・クスリなどがその例である。イシカリは石狩郡・札幌郡・夕張郡・樺戸郡・空知郡・雨竜郡・上川郡の7郡に、トカチは十勝郡・広尾郡・当縁郡・上川郡・中川郡・河東郡・河西郡の7郡に、クスリは釧路郡・白糠郡・阿寒郡・足寄郡・網走郡・川上郡の6郡に、北海道全域では合計86郡に分割されている。



め再び蝦夷地に入った際には、アイヌ語の呼び名をそのままカタカナで表記しようとした<sup>13)</sup>。国後・択捉をめざした嘉永2(1849)年の3度目の渡航時も同様の意見である。上記3回の蝦夷地踏査をそれぞれ、初航・再航・三航とよび、松浦がまだ幕府の役人に採用されていないころの案である。ところが、松浦の地名観はその後また一変する。松浦は、幕府の御雇となった後、アイヌ語の発音そのままを漢字2文字に置きかえて表記することを提案した。これは上司箱館奉行の堀織部正から老中阿部正弘への建議書<sup>14)</sup>に従ったものである。北海道の地名がきわめて読みにくいのはこうした事情である。ここにも、アイヌの立場を理解尊重し、アイヌ語の地名を残そうとした松浦の意図がうかがえる。なお、北蝦夷地カラフトも、松浦の案をとって樺太と表記されることになった。

こうして、明治政府は松浦によってなされた北海道の地域区分に基づき、北海道開拓の第一歩を踏み出すことになる。ところで、蝦夷地を改めて北海道と「道」をつけ、国郡を設定したということは、正式に日本の領土となったことを示す。したがって、「北海道の地名の不幸は、まさにアイヌモンリへの和人の侵略のくつがえすことのできない証拠である<sup>15)</sup>」という批判の声があることも銘記しておかなければならない。かねてから松浦は、アイヌを虐待し縛りつけてきた場所請負制度の廃止を訴えてきた。しかし、明治政府のとった方策は、一応請負人廃止の決定をしながらも、急激な廃止は避け、従来通りの制度を引き継がせた。これに絶望落胆した松浦は、在任わずか8カ月で開拓判官を辞任している。

#### IV. 蝦夷地漁業の実態からみた地域構造

蝦夷地の各請負場所に設けられた交易所である運上屋の分布を示したものが図1である。

これによると、蝦夷地全域で40あまり建てられていた運上屋は、おもに太平洋・日本海の沿岸部や河

口部の要地に設けられていたことがわかる。このように、蝦夷地の開発は海岸部からすすめられ、ことに、ニシンを多く産する積丹半島や、最良品の昆布がとれる襟裳岬一帯に多く点在していた。

本来、運上屋は1場所につき1つを原則としているが、サケの本場である石狩場所においては川筋ごとに細分化され、13カ所(徳鯉・発寒・下札幌・上札幌・篠路・内保・下対雁・上対雁・島松・下夕張・上夕張・下樺戸・上樺戸)にも運上屋が置かれていたことが『石狩日誌』に記述されており、その繁栄ぶりがうかがえる<sup>16)</sup>。これに反して、オホーツク海沿岸には宗谷と斜里だけで、運上屋の数が少ない。これに関して、安政5(1858)年の『戊午日誌』には次のように記されている。網走には運上屋ではなく、運上屋の出張所である番屋があり、運上金も斜里に含まれる。その理由として、弘化・嘉永年間(1844~1853)には、斜里はかなりマス漁がさかんであったが、次第に不漁となり、かつ、アイヌの多くが毎年100人ずつ国後へ、50余人ずつ利尻へ送られ、この地域の漁場は人不足となった。よって場所内のアイヌをやりくりして漁業をするため、場所を細かく分割せず、2つの運上屋に統合されている。

次に各場所ごとのアイヌの数、運上金の金額、持ち場の里数すなわち海岸線の長さなどを、東蝦夷地と西蝦夷地とを対比させてみていくことにしよう。

##### (1) 西蝦夷地の場合

運上金を『三航蝦夷日誌』<sup>17)</sup>から、アイヌ人数を『西蝦夷日誌』<sup>18)</sup>から、持ち場を『東西蝦夷山川地理取調図』尾巻の一覧表<sup>19)</sup>から採り、それぞれの数値について各場所ごとに最高値を100としたポイントで表示した(表1)。

なかでも、人数ポイントと運上金ポイントの2つを抽出し、表1のデータに基づき図3を作成し、場所ごとの差異をみた。西蝦夷地においては、石狩場所がアイヌ人数ポイント・運上金ポイントのいずれ

表1 西蝦夷地各場所の漁業実態

場所名	よみ	人数 (人)	持場 (里)	運上金 (両)	人数 ポイント	持場 ポイント	運上金 ポイント	一人あたり 運上金 (両)	一里あたり 運上金 (両)	一里あたり 人数 (人)
斜里・宗谷	シヤリ・ソウヤ	1,930	122.918	1,100	62	100	33	0.569	8.949	15.701
利尻・礼文	リイシリ・レブン	64	31.267	349	2	25	10	5.453	11.161	2.046
天塩	テシホ	303	14.283	802	9	11	24	2.646	56.150	21.214
苫前	トママイ	211	14.121	547	6	11	16	2.592	38.736	14.942
留萌	ルルモツペ	472	9.052	975	15	7	29	2.065	107.711	52.143
増毛	マシケ	437	8.301	1,340	14	6	40	3.066	161.426	52.644
浜益	ハママシケ	297	8.133	267	9	6	8	0.898	32.829	36.517
厚田	アツタ	72	6.269	320	2	4	9	4.444	51.044	11.485
石狩	イシカリ	3,067	4.133	3,289	100	3	100	1.072	795.789	742.075
小樽	ヲタルナイ	150	5.183	547	4	4	16	3.646	105.537	28.940
高島	タカシマ	199	3.050	367	6	2	11	1.844	120.327	65.245
忍路	ヲシヨロ	125	4.367	327	4	3	9	2.616	74.879	28.623
余市	ヨイチ	564	4.339	556	18	3	16	0.985	128.140	129.983
古平	フルピラ	274	2.250	380	8	1	11	1.386	168.888	121.777
美谷	ビクニ	54	4.154	170	1	3	5	3.148	40.924	12.999
積丹	シヤコタン	75	6.441	203	2	4	6	2.706	31.516	11.644
古宇	フルウ	128	8.283	197	4	6	5	1.539	23.783	15.453
岩内	イワナイ	250	6.205	565	8	4	17	2.260	91.055	40.290
磯谷	イソヤ	83	2.433	319	2	1	9	3.843	131.113	34.114
歌棄	ヲタスツ	209	2.102	210	6	1	6	1.004	99.904	99.429
寿都	スツツ	76	3.333	120	2	2	3	1.578	36.003	22.802
島牧	シマコマキ	128	5.283	200	4	4	6	1.562	37.857	24.228
瀬棚	セタナイ	86	5.121	65	2	4	1	0.755	12.692	16.793
太櫓	フトロ	68	3.367	50	2	2	1	0.735	14.850	20.196
久遠	クドウ	25	5.200	6	0	4	0	0.240	1.153	4.807

注) 人数は『西蝦夷日誌』により文政5(1882)年の数値を、持場は『東西蝦夷山川地理取調図』尾巻により、運上金は『三航蝦夷日誌』により天保年間(1830~1843)の数値を採った。人数は全人口を示す。宗谷・斜里および利尻・礼文は、運上金の金額が合算したものであるため、1場所とみなした。奥尻は『三航蝦夷日誌』に「アイヌ住居なし、運上金2年で30両」と記されているため除いた。

も最高値を示し、他の場所よりもはるかに卓越した場所であることがわかる。これは、先に述べたように石狩場所が13場所にも細分化されていたことでもうなづけよう。なお、樺太場所については、松浦自身、南半分だけしか調査するに至らなかったこともあって、アイヌ人数が不明のため、ここには含まれていない。

ところで、アイヌ人数と運上金との間にはどのような関係があるのか、図3を相関グラフで表現したのが図4で、縦軸に運上金ポイント、横軸に人数ポ

イントがとってある。これによると、西蝦夷地では石狩場所を最高に、どの場所も人数ポイントと運上金ポイントがほぼ比例関係にあることがわかる。相関係数を求めると、0.88ときわめて強い相関であることからもうかがえる。つまり、運上金ポイントが高いということは、漁獲高・生産性が高いということであり、おのずとその主たる労働力であったアイヌ人数ポイントも高いと推察され、生産性が高い場所ほどアイヌの数が多く運上金も多いといえる。

このことを集落形成の観点からみるならば、アイ

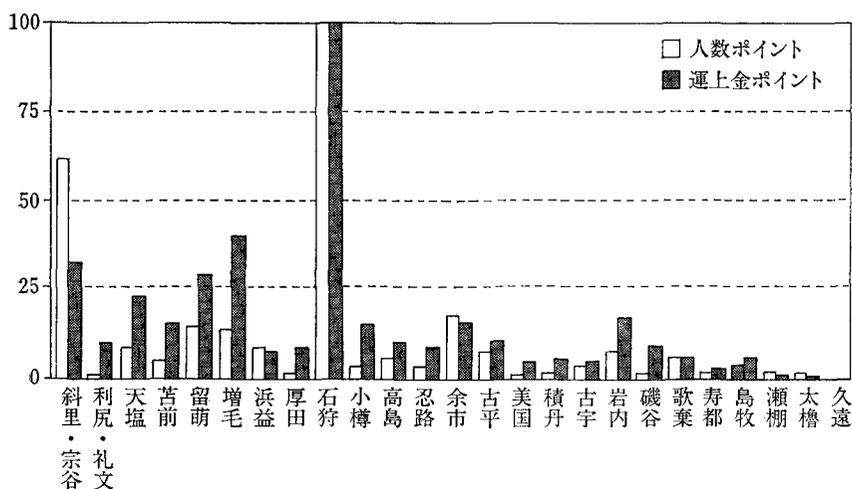


図3 西蝦夷地各場所ポイント  
注) 最高値を100とした。(表1より作成)

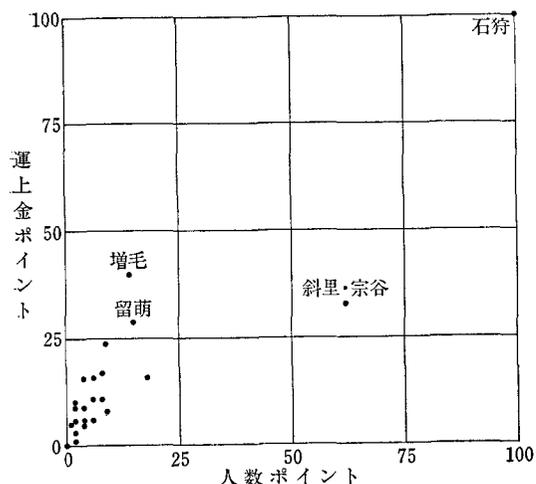


図4 西蝦夷地各場所の人数・運上金  
ポイント相関グラフ

注) 主たる場所名のみ記入した。相関係数  $r=0.88$   
(図3により作成)

又人数と運上金とが比例しているということは、換言すれば、和人も含めた人口と生産との間に相互作用がはたらいっているといえよう。近世に入り畿内を中心に展開された商業的農業の発展に欠くことのできない魚肥の獲得には、北海道のニシン漁業が大きな役割を担っていたことはいままでもない。本来、

禁止されていたはずの和人の進出は、実際には名目ばかりで、多くの和人の蝦夷地への進出は止めることはできなかった。このようにして、多くの人口を引きつけた西蝦夷地の各場所では生産性が向上し、生産性の向上はまた多くの人口を引きつけ、次第に集落を発達させていった。

西蝦夷地ではとくにニシンが豊富に獲れ、干ニシン粕は内地、ことに関西地方へ魚肥として大量に移出され農業発展を支えていた<sup>20)</sup>。それゆえ、松前地方の漁民が追ニシンと称して続々と出漁し、西蝦夷地のニシン漁をさらに一層発展させたのである<sup>21)</sup>。しかし、これらの漁民はいずれも出稼ぎ者で、定着するものではなかった<sup>22)</sup>。松浦の『西蝦夷日誌』によれば、出稼ぎ者はすでに留萌場所にまで達しており、磯谷場所にみられる宮島川・左之助沢のような和名の地名は、出稼ぎ人の名からとったものとされている。

西蝦夷地において、和人の移住を推進させた原動力は、後松前藩治時代におこった天保(1830~43)の飢饉であった<sup>23)</sup>。松前地方や奥羽地方の細民が、やむなく妻子を携えて続々と西蝦夷地に北進移住したのである<sup>24)</sup>。もっとも、西蝦夷地積丹半島の神威

表2 東蝦夷地各場所の漁業実態

場所名	よみ	人数 (人)	持場 (里)	運上金 (両)	人数 ポイント	持場 ポイント	運上金 ポイント	一人あたり 運上金 (両)	一里あたり 運上金 (両)	一里あたり 人数 (人)
国後	後捉	54	94.000	1,000	4	61	33	18.518	10.638	0.574
根室	根室	494	154.000	1,000	36	100	33	2.024	6.493	3.207
厚岸	厚岸	581	60.217	3,000	43	38	100	5.163	49.819	9.648
釧路	釧路	217	30.050	600	16	19	20	2.764	19.966	7.221
十勝	十勝	1,349	24.083	760	100	15	25	0.563	31.557	56.014
幌泉	幌泉	1,099	23.550	380	81	14	12	0.345	16.135	46.666
様似・浦河	様似・浦河	173	13.333	808	12	8	26	4.670	60.601	12.975
三新	三新	459	9.549	1,354	34	5	45	2.949	141.794	48.067
沙流	沙流	222	3.116	310	16	1	10	1.396	99.486	71.245
勇幌	勇幌	309	3.033	235	22	1	7	0.790	77.481	101.879
室蘭	室蘭	1,215	6.033	200	90	3	6	0.164	33.151	201.392
有珠	有珠	1,312	11.433	709	97	7	23	0.540	62.013	114.755
虻田	虻田	231	4.166	239	17	2	7	1.034	57.369	55.448
山越	山越	143	10.483	305	10	6	10	2.132	29.094	13.641
		417	6.266	156	30	3	5	0.374	24.896	66.549
		800	9.316	75	59	5	2	0.093	8.050	85.873
		500	10.266	300	37	6	10	0.600	29.222	48.704

注) 人数は『東蝦夷日誌』により文政5(1822)年の数値を、持場は『東西蝦夷山川地理取調図』尾巻により、運上金は『三航蝦夷日誌』により天保年間(1830~1843)の数値を採った。人数は全人口を示す。様似・浦河は運上金の金額が合算したものであるため、1場所とみなした。静内は運上金が不明のため除いた(アイヌ人数523人、持場4.183里)。白老は運上金が不明のため除いた(アイヌ人数330人、持場5.467里)。

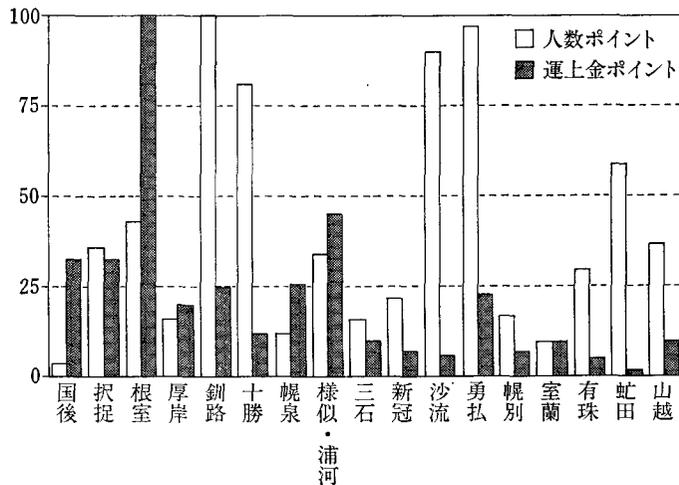


図5 東蝦夷地各場所ポイント  
注) 最高値を100とした。(表2より作成)

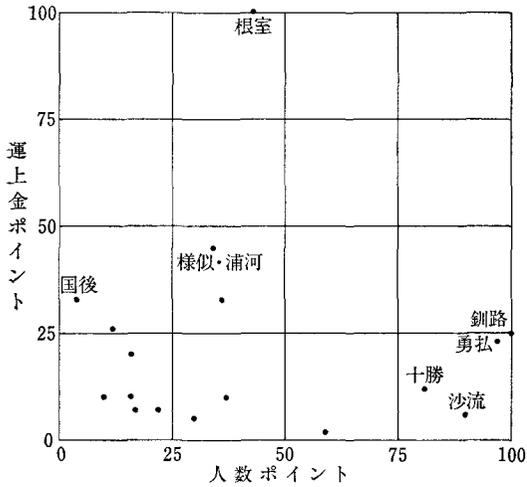


図6 東蝦夷地各場所の人数・運上金ポイント相関グラフ

注) 主たる場所名のみ記入。相関係数  $r = -0.02$  (図5により作成)

岬は、昔から神地として婦女の通行を許さなかったため、妻子をともなった移民はいきおいこの岬から北に進むことができず、古平場所以南にとどまらざるをえなかった<sup>25)</sup>。その後、安政元(1854)年以降、再び幕府の直轄となってから、神威岬における婦女人通行の禁が解かれたので、漁業はめざましい発展を遂げる。

このようにして、西蝦夷地においては南部から漸次、北へ北へと集落が立地して漁業の発展をうながした<sup>26)</sup>。同地域における歴史的発展過程は、アイヌを中心とした地域住民自身にとって「自律的ないし自成的な発達プロセス」をたどったといえるだろう。

## (2) 東蝦夷地の場合

西蝦夷地の場合と同じ方法で、運上金・人数・持ち場の数値を日誌<sup>27)</sup>などから拾い、各場所ごとに最高値を100とした場合のポイントで表した(表2)。各場所ごとの人数ポイントと運上金ポイントをグラフにしたのが図5で、両者の相関関係をみたのが図6である。

図6のグラフから、東蝦夷地では人数ポイントと運上金ポイントが比例関係を成していないことが読み取れる。相関係数は $-0.02$ で、弱い相関である。さらに図5のグラフから、和人地から最も遠い根室場所が運上金ポイントの最高値を示していることがわかる。ちなみに、運上金の数値は石狩場所とほぼ同額の3,000両である。

なぜ人数ポイントと運上金ポイントが比例しないのか、また、なぜ和人地から近い場所ではなく、このように遠い根室場所の運上金ポイントが最高値になったのか、疑問に思われるが、その理由としては、以下のように考えられる。

根室場所は漁場として恵まれた地域にあり<sup>28)</sup>、親潮と黒潮の会う潮境を形成する海域では、幕府に献上する最高級品のサケ<sup>29)</sup>やマスやコンブがとれ、春にはニン、冬でもアザランやラッコなど海獣類が得られる、東蝦夷地第一の漁場であることが日誌に記されており<sup>30)</sup>、領地内には色丹島も含んでいるなど、自然的好条件が備わっていたことが第1の要因としてあげられよう<sup>31)</sup>。

第2に、60里余りにもおよぶ広大な持ち場のわりにはアイヌの数が581人と少ないので、寛政11(1799)年から文政4(1821)年の22年間にわたる前幕府直轄時代には、海防のためにも多くの和人を移住させる<sup>32)</sup>という積極的な策をとったためであろう。ロシアが千島づたいに南下して蝦夷地に迫りつつあったこの時代には、千島とその通路となる東蝦夷地の防備に重点がおかれ、幕府は南部藩と津軽藩の2藩をその防備にあたらせていた<sup>33)</sup>。

このように東蝦夷地では、和人地から遠く隔たった根室場所においても、和人の進出が早く進められ、その活躍が顕著だったのであり、和人の移住範囲が神威岬以南に限定されていた西蝦夷地と大きく異なっている。

第3の要因として、上述のごとく東蝦夷地において和人の定住者が多くなるなかで、ことに飛驒屋久

兵衛や高田屋嘉兵衛などのように大きな資本力をもった請負商人は、根室を拠点として、いままで内地人の手のおよばなかった国後島や択捉島にまで進出して新天地を開拓した。その地で、進んだ漁法をアイヌに教え、漁具を供給し、かつアイヌを使役して計画的かつ大規模な漁業を経営するようになるに至った<sup>34)</sup>こともその理由であると推察される。つまり、根室場所は国後・択捉場所の開発拠点となり、根室場所のサケ、択捉場所のマスという大規模な事業が施され、東蝦夷地の漁業はこの時代に急速な発達をみている。

以上3点の理由から、根室場所が和人地から遠いにもかかわらず、運上金ポイントが最高値となったと考えられる。いずれにせよ、根室場所周辺の海域は、現在においても、サケ・マス・タラバガニ・コンブを中心に世界3大漁場に数えられる黄金の海と言われている。

一方、東蝦夷地において人数ポイントの最高値を示しているのは釧路場所<sup>35)</sup>であり、次いで勇払・沙流・十勝が高ポイントである。これらの場所に共通するのは、いずれも長大な河川（釧路川・沙流川・十勝川）と広大な平野（釧路平野・勇払平野・十勝平野）を有し、アイヌの居住に有利な地形だったためと思われる。

また、勇払川と石狩川とを結ぶ線は、古来よりシコツ（千歳）越えと称され<sup>36)</sup>、勇払川を遡り、千歳川・石狩川を下って西蝦夷地の石狩に達することができるため、前幕府直轄時代にはここに道路が開かれていた。松浦の日記・地図にも、勇払場所と石狩場所との間には石狩越新道があると記されており<sup>37)</sup>、両場所が、太平洋側の東蝦夷地と日本海側の西蝦夷地とを結ぶ陸上交通の要衝となっていたようである。その上、これらの河川は豊富な水産資源に恵まれていたので、アイヌの集落が形成されたり、和人の出入りも多くなるなど、アイヌや和人の人口に移動が生じ<sup>38)</sup>、勇払場所の人数ポイントをきわめて高くし

ている原因の一つになったと考えられる。

後に松浦も、太平洋岸と北海道の本府である札幌とをつなぐ道路づくりの急務を訴え、虻田から洞爺湖を経て札幌に至る道路の開削を明治政府に進言したと伝えられている。札幌から洞爺湖畔へ下りる坂の一つが「武四郎坂」と名付けられ、現在に及んでいる<sup>39)</sup>。一方、西蝦夷地は東蝦夷地と異なり、山が海にせまって断崖をなし、雄冬岬を越えるまでは難所の連続で、ほとんど陸路を行くことはできなかった。

以上のように、東蝦夷地においては運上金と人数とがそれぞれ独立した要素であり、両者の間に比例関係が成立しないのは、西蝦夷地とは異なった歴史的発達過程があったからだと考えられる。つまり、寛政11（1799）年に幕府の直轄となった東蝦夷地では、文化4（1804）年の西蝦夷地におけるそれと比べて、幕府の行政・施策が早くから随所に着手されていたといえる。すなわち、東蝦夷地は和人の支配政策の影響を多分に受けた「政策的発達プロセス」をたどったことが考えられ、前記の西蝦夷地の自律的ないしは自成的発達プロセスと対峙しているのである。

## V. 和人地からの距離がもたらす地域の特性

蝦夷地には、東蝦夷地・西蝦夷地の2大区分のほかに、口蝦夷地（あるいは近蝦夷地）・奥蝦夷地の区分もあった。

和人地に近い地域が口蝦夷地で、それ以奥が奥蝦夷地と呼ばれていた。しかし、境界線については、東蝦夷地と西蝦夷地の区分のように厳密な定義はなく、東蝦夷地ではだいたいにおいて襟裳岬、西蝦夷地では神威岬もしくは雄冬岬など諸説もあったが、本稿では、東蝦夷地で勇払以南、西蝦夷地では石狩以南とする。なぜなら、前章でも述べたように、勇払川と石狩川を結ぶ地峡部で二分する<sup>40)</sup>のが通説だ

表3 奥蝦夷地・口蝦夷地におけるアイヌ人数の推移

	文政5(1822)年			安政6(1859)年	
	アイヌ人数(人)	持ち場(里)	アイヌ集約度(人)	アイヌ人数(人)	アイヌ集約度(人)
奥蝦夷地	9,958	635.308	16	11,131	18
口蝦夷地	8,964	127.174	70	4,586	36
合計	18,922	762.482	25	15,717	21

注) 文政5年の数値は表1・表2より、安政6年の数値は『東西蝦夷山川地理取調図』尾巻より作成。

からである。

松浦は、弘化3(1846)年、2回目の蝦夷地調査として樺太に渡った帰路は、宗谷より陸路を石狩まで出て、これにより川船で千歳を経て東海岸の勇払に至るといふコースをとった。すなわち、口蝦夷地・奥蝦夷地の境界を実地調査したわけである。この時の記録は、『再航蝦夷日誌』巻之七に、「此巻は前につつき石カリ運上屋を始めとして丙午の九月東部ユウフツに出る日記をもてするすものなり」と、「石狩川筋之図」も併せて詳しく記録されている<sup>41)</sup>。

では、口蝦夷地と奥蝦夷地の両地域では、どのような相違点がみられるだろうか。まず、Ⅲ章で明らかにしたように、口蝦夷地の方が和人による開拓が早かったため場所が細分化され、一つの場所が小さい。また、奥蝦夷地に比べれば暖地のため、わずかではあるが米作も行なわれつつあったようで、日誌には、久遠・太櫓・瀬棚・島牧の各場所における運上金に「備米五表」も加えられていることが記録されている<sup>42)</sup>。

次に、前幕府直轄時代にあたる文政5(1822)年のアイヌ人数を調べた(表3)。表1の斜里・宗谷から厚田までを奥蝦夷地、石狩から久遠までを口蝦夷地、表2の国後から沙流までを奥蝦夷地、勇払から山越までを口蝦夷地として集計すると、奥蝦夷地のアイヌ人数は合計9,958人、口蝦夷地では合計8,964人となる。アイヌ人数の総合計18,922人のうち、53%は奥蝦夷地に、47%は口蝦夷地にという比率となり、人数の上では両地域に大差は見られない。しか

し、持ち場の合計は奥蝦夷地が635.308里、口蝦夷地が127.174里であり、必然的に、持ち場一里あたりのアイヌ人数すなわちアイヌ集約度は、口蝦夷地が70人で、奥蝦夷地の16人に比べるとはるかに高くなる。なお、口蝦夷地のアイヌ集約度は8,964人/127.174里であり、奥蝦夷地のそれは9,958人/635.308里で算出した値である。

これは、早くから開けた口蝦夷地の各場所にアイヌが強制移住をさせられ、労働力としてのアイヌが多く投下されたことや、蝦夷地での流通システムと関係があるのではないかとと思われる。当時、蝦夷地での船舶出入りは松前藩や幕府によって強く統制されており、蝦夷地と内地との間の流通はきわめて特殊な形をとっていた。つまり、漁獲物の内地への移出は生産地から直送できず、また内地からの物資の移入も直接各場所に輸送できず、必ず指定港(松前・箱館・江差)を経なければならぬ仕組みになっていたからである<sup>43)</sup>。

蝦夷地における産物の集荷・移出は西蝦夷地産分を松前・江差が引き受け、東蝦夷地産分を箱館で取り扱っていた<sup>44)</sup>。上記3港は今日でいう中継貿易港としての性格をもっていたわけである。すなわち、和人による流通の結節点(いわゆる集散都市)である松前・箱館・江差からの距離が近いということも、アイヌ人数を口蝦夷地に密集させた要因であろう。文政5(1822)年におけるアイヌ人数の約半数が口蝦夷地に集積している所以である。

しかしながら、34年間の空白期、すなわち幕府の

監督下からはなれ再び松前藩の支配を経ることにより、大きな変化がみられる<sup>45)</sup>。安政6(1859)年の松浦の調査書によれば<sup>46)</sup>、奥蝦夷地では11,131人とアイヌ人数が文政5(1822)年よりも増加しているが、口蝦夷地では4,586人で文政5年の約半分に激減している。松浦が憤然として筆をとって告発したように、これが場所請負人の酷使によることはいまでもない。とくに、石狩場所は「請負人の非道な処置にて人口減少す」<sup>47)</sup>と日誌にもあるように、3,067人が670人に激減した。さらに、アイヌと和人の接触交渉の度合いが著しく進んでおり、両者の間の武闘や、和人からもたらされた疫病、ことに痘瘡の猛威<sup>48)</sup>もアイヌ人数減少の重要な契機であった。

これを、安政年間の和入地における和人の人数と比較してみる。松前3万余人、箱館3万余人、江差2万余人、熊石6,353人、合計86,353人<sup>49)</sup>で、これに蝦夷地へ移住定着した和人も加えると相当な数となり、蝦夷地全島でわずかに約15,000人ほどにしかなかったアイヌ人数をはるかにしのぐことになる。このように、和人が和入地から口蝦夷へ、口蝦夷地から奥蝦夷地へと北漸するにともない、アイヌが主人公であった蝦夷地は、もはやアイヌモンリではなく、和人が収奪し経営する植民地と化していったのである。

## VI. おわりに

本稿では次のことを明らかにし得たと思う。

(1) 松浦の行なった86郡の地域区分は、アイヌの住み分けに基づく“場所”が根拠となっていたと考えられる。また、11カ国の分割は、場所という社会的境界と、分水嶺という自然的境界に従って定められている。

(2) 運上屋はニンヤサケを産する海岸や河口の要地に設けられ、蝦夷地の開発は海岸部から進められた。

(3) 西蝦夷地においては、人数、運上金ともに石

狩場所を最高値として、運上金とアイヌの人数がほぼ比例関係にある。

(4) ところが東蝦夷地においては、和入地から最も遠いにもかかわらず、和人の進んだ漁法が行なわれ、東蝦夷地第一の漁場であった根室場所が、運上金の最高値を示している。政策的な和人の移住と計画的かつ大規模な開拓も大きな理由であろう。また人数の最高値は釧路場所であり、次いで勇払・沙流・十勝が高い。それは、いずれもアイヌの生活に有利な地形による。また、勇払場所は陸上交通の要衝であったので、アイヌ人数が多い。

(5) 和入地に近い口蝦夷地の方がアイヌ人口密度(集約度)が高い。和入による開拓が口蝦夷地から進められたことや、蝦夷地の特殊な流通システムによる。

なお、今後の課題として、アイヌの住み分けの境界と、和人が設定した“場所”の境界との間のくいちがいはなかったか、境界をめぐるアイヌ部族同士の紛争についてなど、松浦の地図・野帳の景観スケッチ・日誌から、境界に焦点をしばり追求していきたい。さらに、松浦の行なった地域区分の境界が、今日ではどの位置に相当するのか、また、その正確度を現在の地形図に即して検証してみたい。また、松浦がもっとも関心をよせたアイヌの部族ごとの生活様式や文化の違いなどを、松浦の観察記録や収集資料を通して取り上げ、アイヌ民族と周辺の北方諸民族との文化交流へと研究の視点を広げていくひとつの契機としたい。

(名張桔梗丘高校・非)

### 〔注〕

- 1) 松浦武四郎阿倍弘(1869):『道名之儀取調候書附』(吉田武三『増補松浦武四郎』松浦武四郎伝刊行会)
- 2) 前掲1)
- 3) 秋葉 実(松浦武四郎研究会会長)「蝦夷は漢音でも呉音でもエゾとは読めない。カイである。

- では、なぜこれをエゾと読んだのか。西暦6～700年、日本に唐の文化が入ってきたころ、唐では辺境人のことをエンチウと言った。そこで、日本は唐をまねて蝦夷という文字はそのままにして、読み方は大和読みのエゾとしたのである。」(昭和63年アイヌ文化財専門職員等研修会、於：札幌、「松浦武四郎とアイヌ」の講義より収録)
- 4) 吉田東伍(1909)『大日本地名辞書』
- 5) 横山健堂(1944)：『松浦武四郎』北海出版社、1頁。「畿内八道、何人が道名を考えたかは历史上に伝わっていないのに、北海道だけが分かっているというのは、武四郎不滅の大光栄でなければならぬ。」
- 6) 松浦武四郎源弘(1859)：『東西蝦夷山川地理取調図』首巻(凡例)。「西部関内村東部山越内ヨリ南ノ方シャモ地ノ部ハ人家多キカ故ニ……」
- 7) 松浦 弘(1850)：『初航蝦夷日誌』(吉田武三校註『三航蝦夷日誌』上巻、吉川弘文館)、41頁。
- 8) 前掲7)、468頁。「松前と称する処は松前沖の口より西は熊石村ニ至る東は山越内御境目に至る。其間を忽而シャモ地と云。是より奥をしてバンショと云。バンショは場所也。又アイヌとも云。此の場所のことは何処場所と其請負地を云よりし而起りしものなり」
- 9) 多氣志樓主人(1859)：『蝦夷漫画』国書刊行会。神にささげる物。ぬき。にぎて。御幣。
- 10) 前掲6)。現在の北海道本島と国後・択捉島までを経緯度各1度で割り26枚の中に収め、それぞれ1枚1枚は互いに連結し、これをつなぐと縦2.5m・横3.5mの大図となる。また、今日の地図と異なり、南北が反対になった地図である。
- 11) 松浦開拓判官安倍弘(1869)：『北海道国郡全図』「国郡ノ分割都土人従来ノ界ヲ以テ定ム」
- 12) 前掲7)、234頁。「ヤムウシナイ。ヤム(栗)、ウシ(多い)、ナイ(沢)、栗多沢と訳すべし。当時皆山越内と云は書訛りなるべし。夷語多くは其形勢によりて號ることなれば、其字にて大ニ風土を知ること有りべし。」
- 13) 松浦 弘(1850)：『再航蝦夷日誌』(吉田武三校註『三航蝦夷日誌』上巻、吉川弘文館)、519～520頁。「何れ此処の名は皆片仮名書きよろしかるべし。然るに後世漢字をもて当てしは却而訛転の業ともなりてよろしからず。仮名書にし有時は却而風土を知る一助ともなるべきものをや。」
- 14) 前掲13)、537頁。「将た又村名小名之義は、只今まで夷語にて通用致し来り候唱に似通ひ候和音に直し、真名仮名とも引当候様、取調之方、士人ども耳馴れ便利宜しくと奉存候。」
- 15) 花崎泉平(1988)：『静かな大地』岩波書店、48頁。
- 16) 多氣志樓(1860)：『石狩日誌』(吉田武三編『松浦武四郎紀行集』下、富山房)、268頁。「鮭漁屋並びたり。此地鮭漁の繁昌成る事思知らる。鮭、一色なり。」
- 17) 松浦 弘(1850)：『三航蝦夷日誌』(吉田武三校註『三航蝦夷日誌』上巻・下巻、吉川弘文館)弘化2(1845)年・弘化3年・嘉永2(1849)年の3回にわたる蝦夷地探検の記録をそれぞれ『初航蝦夷日誌』12巻、『再航蝦夷日誌』15巻、『三航蝦夷日誌』8巻とし、これらをまとめて『三航蝦夷日誌』計35巻と呼ぶ。
- 18) 松浦武四郎(1859)：『西蝦夷日誌』(吉田常吉編『蝦夷日誌』下、時事通信社)
- 19) 前掲6)、尾巻。
- 20) 荒居英次(1963)：『近世漁村史の研究』新生社、536頁。
- 21) 『新北海道史』第2巻通説1、230頁。
- 22) 前掲21)、637頁。
- 23) 足利健亮(1977)：『和人人村落の展開』(藤岡謙二郎編『日本歴史地理総説』近世編、吉川弘文館)、326～328頁。「天保飢饉以後の出稼漁民の北進が明治以後における北海道沿岸漁村の祖型を形づくる作用をなしたことは否めないであろう。」
- 24) 前掲21)
- 25) 前掲21)
- 26) 柿本典昭(1987)：『漁村研究』大明堂、27頁。「かつて和人がアイヌの先住するエゾ地に進出して、ニシンの漁期だけの仮の家を建て生活し、漁期がおわれば、小屋を閉じて郷里に戻ったという出漁や漁業出稼によって、北海道の漁業が発展したのは事実であり、現在の北海道の市町村のルーツは、そこまでさかのぼらなければならないことも事実であろう。」
- 27) 松浦武四郎(1859)：『東蝦夷日誌』(吉田常吉

- 編『蝦夷日誌』上、時事通信社)
- 28) 多氣志樓(1863):『知床日誌』(吉田武三編『松浦武四郎紀行集』下、富山房)、457頁。「子モロは東部第一の繁昌、地形北は舍利の山々、西はクスリ領より厚消に続き、惣而平地、東南に海有。会所元は其一岬の北面にして、前にクナシリ、ノツケを遠望して湾をなし、漁場多し。土産(鮭・鯡・鱒・鱈・昆布・水獣・こまい・きうり・海鼠・海草・椎茸・稚魚数多し)数ふるにいとまなし。此湾別て漁業の最中なれば銀腮金卵砂上に鋪満ち、出入りの船絶えず。」
- 29) 前掲27)、339頁。「西別川、幕府献上の鮭を取る。」
- 30) 前掲7)、424頁。「当処は蝦夷地第一の見込場所ニ而毎年凡五千石目位有之候。去戊申の年は凡壱万石目も有之ひしかや。其余春鮭も多し。其ことをするさば、運上屋前ニ八尺位の釜凡六十七、八も粕を煮る為ニ有る也。是ニ而当所漁事の盛んなること見るべし。」
- 31) 前掲17)
- 32) 松浦竹四郎源弘(1858):『近世蝦夷人物誌』(吉田武三編『松浦武四郎紀行集』下、富山房)、181頁。「根室領は広大で、沿岸60余里の地にして、当時の人口漸々596人となりしが故に、中々漁業行届くべき様なきが故に、多くの和人を入れて其漁業の手伝いを致せあるに、その日雇の稼人は多く秋田・南部・津軽等より数百里をへだてて来る」
- 33) 吉田常吉編(1962):『蝦夷日誌』下、時事通信社、285頁。
- 34) 前掲21)、225頁。
- 35) 前掲27)、303頁。「釧路川蝦夷地第一の人家の立連りし場所」
- 36) 前掲4)
- 37) 前掲27)、112頁。「当所より石狩越新道有」
- 38) 前掲27)、107頁。「此辺は皆南受の暖地にて、沙浜浪打際より上に(23丁)路有、つまづく石一つなく、罌屋左右に立並び、酒屋、茶店もさまざまのれんさげ、中々に言さえく蝦夷人の里とは思われず。」
- 39) 読売新聞北海道支社(1975):『現代に残る北

- 海道の百年』、62頁。
- 40) 前掲4)、「勇払川は西海の石狩川と併称せられて、其水脈は口蝦夷と奥蝦夷を分つものとす。古人は、この水脈を以て、蝦夷島は二分せられしやにも説けり。」また、最上徳内は『蝦夷草紙』に、蝦夷島の形を瓢箪にたとえ、くびれた形の処をシヨツ越えという山越えの路があり、これより松前の方を口蝦夷、又遠方を奥蝦夷とした。
- 41) 小林和夫(1979):松浦武四郎の石狩川踏査、北海道地理、53、27~39頁。この地図は、松浦が歩測とアイヌからの聞き取りから作成したもので、おのずと限界があり、開拓使雇い技師で地質学者のベンジャミン・S・ライマンや、開拓大判官松本十郎からは内陸山間部の不正確さが指摘されたが、その手厳しい批判に甘んじねばならぬものであろうかを小林氏は論じている。
- 42) 前掲13)
- 43) 前掲20)、539頁。
- 44) 前掲20)、545頁。
- 45) 高倉新一郎(1959):『蝦夷地』至文堂、173頁。
- 46) 前掲19)
- 47) 前掲18)、200頁。
- 48) 前掲23)、蝦夷戸口の変遷、332~336頁。
- 49) 前掲19)
- \* 松浦武四郎には、竹四郎・文桂・弘・雲津・憂ぶんけい ひろむ うんしん うれ  
北生・多氣志樓・竹四郎源弘・武四郎阿倍ほくせい たけしろう みなもとのおちむ あべの  
弘・北海道人・馬角齋など多くの雅号がある。  
本稿では原著に従った。

#### 〔付記〕

本稿は平成元年度関西大学大学院に提出した修士論文の一部に加筆、修正を加えたものである。その一部については、平成3年度歴史地理学会大会において発表した。論文作成にあたり、柿本典昭先生をはじめとする関西大学地理学教室の諸先生方に終始御指導をいただいた。また、三雲町教育委員会の方々から資料提供、ならびに御協力をいただいた。ここに記して厚くお礼申し上げます。

THE REGIONAL STRUCTURE OF EZO-CHI IN THE WORK  
OF TAKESHIRO MATSUURA (1818-1888)

Hiroko KATAKAMI

Matsuura is one of the explorers in Ezo-chi during the late Edo period. In 1869 he gave the name *Hokkaido* to Ezo-chi. He was always sympathetic to the Ainu. The purpose of this paper is to clarify the regional structure of Ezo-chi through the maps and diaries made by him.

The results are summarized as follows :

1. He classified Hokkaido into 11 counties and 86 districts according to the *basho*, which was based on the residential segregation of the Ainu.

2. Most of the *unjo-ya* (trading posts) were located along the coast and at the mouth of the rivers. Ezo-chi was developed from the coastal area.

3. In the western part of Ezo-chi, the population of the Ainu was in direct proportion to the *unjo-kin* (premium). Ishikari Basho showed the largest population and *unjo-kin*.

4. In the eastern part of Ezo-chi, the largest amount of *unjo-kin* was in Nemuro Basho, although this place was the furthest from the *Wajin-chi* (the settlement of the Japanese). The reason for the large *unjo-kin* was that the Japanese developed this place politically under the reign of the Tokugawa Bakufu. The population in Kushiro, Yufutsu, Saru and Tokachi was the largest because these places were comfortable to live in for the Ainu.

5. Kuchi Ezo-chi (near *Wajin-chi*) was densely populated by the Ainu because the Japanese exploited there early and they developed a special distribution system.